

本論文は、一般には政治と宗教の厳格な分離として理解されるフランスのライシテ制度が、実際には「排除」「管理」「選別」という複数の側面を含んでいることを、19世紀末から20世紀初頭の三都市における病院のライシテ化を事例として明らかにしたものである。フランスでは1990年代以降ライシテ研究が興隆するが、その研究状況に照らして本論文独自の特徴と認めうるのは、第一に、看過されてきた病院という場所を主題化したこと、第二に、「単一不可分の共和国」というナショナリズム的言説に抗して地域的多様性を強調したことである。こうした視座のもと本論文は、パリ、リヨン、ボルドーの各種文書館に保管される医療行政に関する古文書や、当時の書籍、雑誌、新聞、パンフレットなどの一次資料を元に、三都市それぞれのライシテ化の過程を描きだすことに成功している。さらに、そこから抽出した「排除」「管理」「選別」というライシテの類型を用いることにより、21世紀の現在に至るフランスの政教関係について、連続性と変化とともに解明することの可能性をマクロン政権の宗教政策などを事例に論じている。

本論文の構成は、政治学・法学とも接点をもつ、政教関係に関する理論的関心と、地域研究・歴史研究に属する歴史分析を統合すべく、前半を理論編、後半を事例編としている。理論編では、フランス国内では「あるべきライシテ」をめぐる規範的論争に陥りやすいライシテ概念を、宗教（宗教団体・宗教者等）に対する政治（国家・地方自治体等）の関わり方として広くとらえることで、分析概念として鍛え直している。さらに宗教社会学の主要概念である世俗化とライシテ化概念の異同を、それぞれの研究史の文脈をふり返りつつ再整理し、ライシテ化の語を用いることの積極的意義を論じている。事例編では、パリのように病院から修道女や司祭を完全に排除した都市は他にはなく、リヨンでもボルドーでも共和派の政治家は教会との何らかの妥協を余儀なくされるが、しかしそれがあくまで統制の諸形態として制度化されていった過程を丁寧に跡付けている。

総合すれば、本論文は、現在もイスラムをめぐるアクチュアルな問題であり続けるライシテの深層への理論的視座と、具体性・個別性に着目する歴史研究を有機的に組み合わせることで、学際性を特徴とする宗教学らしい研究となっており、また、既発表論文を練り直して組み込んだ章も多く、博士論文としての水準に達している。欲を言えば、理論研究としてはフランス内のライシテ論争の重層性への目配りや世俗化論争のより総合的な分析、歴史研究としては従来の「宗教」「政治」概念からこぼれおちるリアリティの描写、宗教と政治の切り分け自体の近代性の再考が求められるが、今後継続してそれらの課題に取り組んでいくことが十分に期待できる。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。